

## 【基礎調査研究B：患者対象】

### がん治療に伴う外見の変化とその対処に関する実態調査

) 日常生活のネガティブ変化への影響要因

) 医療者に対する情報提供の期待と内容

分担研究者 野澤 桂子 国立がん研究センター中央病院アピアランス支援センター

本研究班は、アピアランスケアの e ラーニング教材及び指導者教育プログラムを検討するため、その基礎データを得る目的で、医療者及び患者、一般人を対象とした基礎調査研究を行った。本報告書は、患者を対象とした調査研究の概要を報告する。

本研究の目的は、患者を対象に、外見変化によって直面する社会的困難の実態（種々の外見変化の有無、社会活動への影響、実際に行った対処方法）と情報・支援ニーズ（必要とした情報、医療者に期待する内容、適切な情報提供方法等）を明らかにすることである。

有効回答 1034 名(男性 518 名,女性 516 名),対象者の平均年齢は  $58.66 \pm 10.64$  歳(27-74 歳)であった。外見変化の体験者は 601 名(58.1%)。体験頻度・苦痛度ともに高い症状(乳房切除・頭髮脱毛・太る・浮腫・爪剥離など)と、頻度は低い苦痛度が高い症状(ストーマ・爪膿瘍・身体一部切除など)が明らかになった。また、医療者が外見の対処方法を説明することには、92.6%が肯定した。外見問題の対処に必要なだったが十分得られなかった情報としては、復職や復学時の対処方法、スキンケア、外見変化の周囲への説明方法、脱毛前のケアや準備、爪障害予防法、再発毛の知識、爪障害対処法が多かった。それらのケアについては、意識的に e-learning 開発時に組み込む必要性がある。

外見への変化の懸念が日常生活に与える影響を共分散構造分析により検討した結果、「かわいそうだと思われたくない」「外見の変化からがんとばれた」という意識が強いと、外出や対人交流、仕事や学業を減少させ、人間関係の不和を高めることもわかった。がん患者の外見変化の懸念は対処行動と日常生活に影響を与えるため、対処技術の教育だけでなく、がんと外見に対する意識変容のための教育も必要である。医療者対象の教育内容の検討に際して基礎資料になりうる貴重なデータが得られ e - ラーニングに反映させた。

なお、研究結果は、日本緩和医療学会第 1 回関東甲信越学術大会及び第 33 回日本がん看護学会において発表したほか、共同通信によって配信され山口新聞 2018/11/14 ほか多数の新聞に紹介された。現在、2 本の論文を投稿中である。

研究協力者	藤間 勝子	国立がん研究センター中央病院アピアランス支援センター
	清水 千佳子	国立国際医療研究センター病院 乳腺腫瘍内科
	上坂 美花	患者代表： Cheer Woman チアウーマン第 3・4 期事務局長
	改發 厚	患者代表： 精巣腫瘍患者友の会
	岸田 徹	患者代表： NPO 法人がんノート
	桜井 なおみ	患者代表： 一般社団法人 CSR プロジェクト
	山崎 多賀子	患者代表： NPO 法人キャンサーリボンズ

## A. 研究目的

### 1. 背景

がんの治療法や有害事象緩和技術の進歩、入院期間の短縮化、外来治療環境の整備などにより、就労の継続など、社会と接点をもちながら治療を行う患者が増加している。第3期がん対策推進基本計画の「尊厳を持って安心して暮らせる社会の構築」実現のためにも、今や外見のケア（アピアランスケア）は、医療者が備えておくべき支持療法の一つといえよう。

にもかかわらず、長い間、外見の変化は致命的なものではないために軽視され、医療者は、乏しい科学的根拠や情報、個人的な経験に基づく処置や指導を行ってきた。実際、本研究者らが既に実施した7つの研究からは、抗癌剤添付文書の副作用に関する記載さえも系統立っておらず、インターネット上には医学的根拠のない、または有害なケア情報が40%も氾濫していること、医療者が患者指導に困難を感じている状況が明らかになった。

また、本研究者らは、2012年度より、がん診療連携拠点病院397施設の医療者向けにアピアランスケア研修会を行い、延べ1114名に対する教育を行ってきた。しかし、2017年度は研修会参加者の募集開始から30分で満席となり、患者の支援ニーズを実感している現場医療者の希望に、全く対応できていない状況にある。

今後は、医療者が行うアピアランスケアの標準化及び均てん化を図ることが求められ、そのための研修内容を再構築する必要に迫られている。

確かに、これまでも、その研修内容を構築するための基礎データとなりうる外見の変化に対する研究は、いくつか行われてきた。しかし、例えば、男性（Nozawa et al, 2017）や乳がん患者（Nozawa et al, 2015；藤間ほか, 2015）のように対象を限定したものであったり、全癌種を対象とした2009年の調査（Nozawa et al, 2013）からは8年が経過しているなど、従来の研究は現状を反映しているものではなかった。実際、当時と比較して分子標的治療の増加や免疫療法の登場など、治療状況が変化しているだけでなく、政策的に就労支援が推進されるなど、ここ数年で患者をとりまく社会状況も大きく変化している。

そこで、医療者のアピアランスケアの質を担保する教育プログラムを構築し、がん患者のアピアランスケアの提供体制モデルを作成するために、新たな基礎データを得る必要がある。

### 2. 目的

がん患者を対象に、外見変化によって直面する社会的困難の実態（種々の外見変化の有無、社会活動への影響、実際に行った対処方法）と情報・支援ニーズ（必要とした情報、医療者に期待する内容、適切な情報提供方法等）を明らかにする。

## B. 研究方法

### 1. 研究デザイン 横断的調査研究

### 2. 研究対象者

以下の適格要件を全て満たす患者1000名

- (1) 20歳以上75歳未満の男女
  - (2) がんの診断が臨床的もしくは組織学的に確認されている者（ただし自己申告による）
  - (3) 現在、がん治療を受けている患者もしくは現在は治療が終了し経過観察中の者
  - (4) 本研究への参加同意が得られ、インターネットデバイスに関する操作に問題のない者
- ・対象者数設定の根拠

患者の外見変化とその対処の実態を把握するという目的のため、特定のがん種に対象者を限定しない。しかし、結果の解析ではがん種の違いによる検討をするため、回答をグループ化して分析を行えるよう約1,000件のデータが必要となると見積もった。

### 3. 方法

#### 3.1. 調査方法

スクリーニング調査によって抽出されたがん患者に対して、インターネットを通じ、事前に設定した調査項目を一斉発信して回答を求めた。

#### 3.2. 手順

本研究では、医療者向け教育資料を開発するために、がん患者のアピアランス問題に対する対処法や意識等について幅広く把握するという目的を達成

する上で、インターネット調査の手法を用いることが有効であると判断した。

インターネット調査を実施するにあたり、日本マーケティングリサーチ協会に加盟しているインターネット調査会社から、モニターに関する公開資料を参考に、登録属性の著しい偏りや登録情報の更新頻度を研究者間で点検し、インターネット調査会社を選定した。

調査手順は次の通りである。まず、本調査に先立ち選定したインターネット調査会社に調査協力の登録をしているモニターを対象に、がん患者の抽出を目的としたスクリーニング調査を、インターネットを通じて行った。スクリーニング調査では、年齢およびがん罹患の有無（治療終了後の場合を含む）を問い、適格基準(1)-(4)に該当するがん患者を抽出した。その際、可能な限りがんの男女別部位別罹患率（平成 2012 年度の新罹患患者数：最新がん統計 2017）に比例するよう、本調査対象候補者を無作為抽出した。調査用紙の全項目を回答した有効回答だけを累計して割付通りの対象者数が 1000 名に達した時点で調査を終了した。

### 3.3. 調査期間

国立がん研究センター倫理審査委員会による研究許可日（平成 30 年 2 月 21 日）から 2 ヶ月。

### 3.4. 調査項目

先行研究（Nozawa, K. et al., 2013; K. Nozawa et al., 2017; 鈴木公啓ら, 2017）および予備研究の結果をもとに、医師 1 名・臨床心理士 2 名・美容専門家 2 名・患者会代表 4 名で検討のうえ、以下の質問項目を作成した。

#### (1) 対象者の個人属性

年齢、性別、居住地、罹患したがん種、学歴、職業

#### (2) 治療に伴う外見変化や身体症状の実態に関する項目

- ・外見変化の経験の有無（1 項目）
- ・外見変化の体験の有無とその苦痛度（29 項目）
- ・外見変化以外の身体症状の体験有無とその苦痛度（26 項目）

#### (3) 外見変化への対処の実際に関する項目

- ・外見変化への対処の経験（25 項目）
- ・外見変化への対処に伴う日常整容の変化（5 項目）

#### (4) 外見変化が日常生活や社会性におよぼす影響

#### に関する項目

- ・外見変化による日常生活や人間関係の変容（13 項目）

#### (5) 外見変化に関する情報提供に関する項目

- ・外見変化に関する医療者からの説明の有無（1 項目）
- ・外見変化に関する医療者からの説明の判りやすさ（1 項目）
- ・外見変化に関する医療者からの情報提供の量（1 項目）
- ・外見変化に関する医療者からの説明の満足度（1 項目）
- ・外見変化に関する医療者からの情報提供の必要性（1 項目）
- ・外見変化に関する情報提供者の信頼度と実際の利用状況（24 項目）
- ・外見変化の対処方法として必要な情報と獲得の有無（13 項目）

#### (6) ウィッグ購入に関する項目

購入の有無・購入回数・購入価格

#### (7) 外見変化へのアドバイスに関する項目

- ・医療者からのアドバイスに関する項目（1 項目）
- ・その他、有意義なアドバイスや役立たなかったアドバイス（5 項目）

#### (8) 治療中に受けた美容ケアに関する項目

- ・トラブルの有無と内容（2 項目）

#### (9) がんに対する一般的な対処行動に関する項目

（1 項目選択）

### 3.5. 主要な統計学的考察

- ・各変数の度数分布、記述統計の算出を行った。
- ・がん種と外見変化への対処、日常生活への影響、情報の獲得状況、外見変化への対処として必要な情報、必要な情報やケアのニーズ等の関連性を検討するための統計的解析（相関係数の算出、T 検定、分散分析等）を行った。
- ・外見変化の体験・苦痛度と日常生活や社会性の変容についての統計的解析（相関係数の算出、T 検定、分散分析等）を行った。

### 3.6. 倫理面への配慮

本研究は、国立がん研究センター研究倫理委員会の承認を得て実施された。なお、本研究は匿名で実施され、対象者の氏名住所などの個人情報扱わないものとした。

また、本研究における調査は、介入なしの観察研究であり、人を対象とする医学系研究に関する倫理指針に則れば必ずしもインフォームド・コンセントは必要ではない。しかし、改訂個人情報保護法への対応として、次の手続きをもって調査の趣旨説明を行い、対象者の同意を取得した。

本研究の調査実施に先立ち、対象者がアクセスした最初の画面に研究趣旨説明書を提示して説明を行った。画面には、目的、方法、予想される利益と副作用、プライバシーの保護、研究への参加が自由意思によるものであること等を説明し、回答した内容が研究者に研究目的で譲渡されることを明記した。その上で、解答画面の最初にチェックボックスを作り、そこにチェックをすることで対象者の同意を得た。

### C. 研究結果

調査期間は、2018年3月2日～3月22日であった。詳細な分析は今後の予定であるが、概要は、以下の通りである。

#### 1. 回答数

がん患者 1034 名（男性 518 名，女性 516 名）から回答を得た。

#### 2. 対象者の属性

・平均年齢：58.66 才（27 才 - 74 才）

・がん種別人数

男性：【胃】93 【大腸】80 【肺】79

【前立腺】76 【肝臓】29 【その他】161

女性：【乳房】120 【大腸】82 【胃】59

【肺】36 【子宮】36 【その他】183

### 3. ) 日常生活のネガティブ変化への影響要因

#### 3.1. 外見変化の有無と苦痛度

がんの治療によって外見が変化したと答えた人は全体の 58.1%（601 名）。

性別（性 69.2% > 男性 47.1%）と疾患別（乳がん 92.5%，男性の最多は「肺がん」54.4%）により、体験した外見の症状は、手術の傷 84.5%，脱毛 38.3%，痩せた 38.1%の順に多かった。

苦痛度を図 1 に示す。

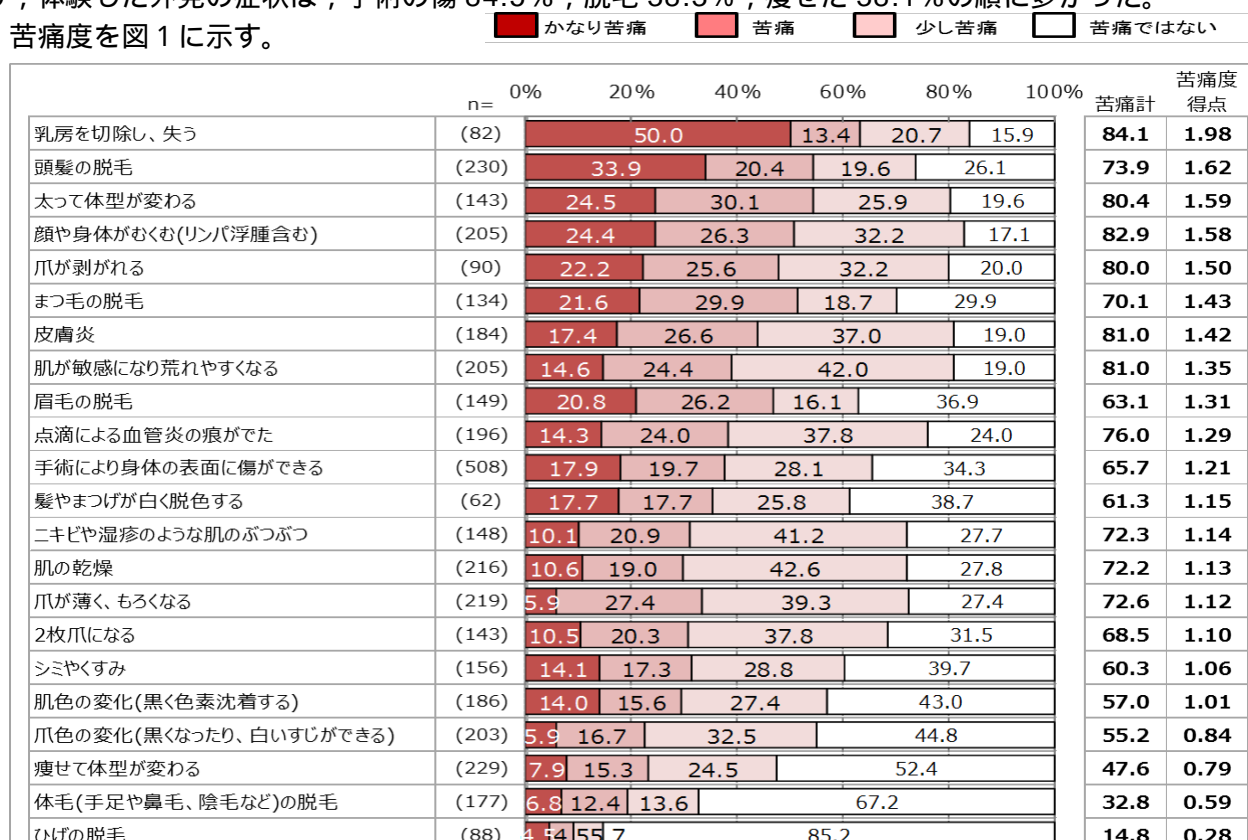


図 1 症状別苦痛度ランキング（体験頻度 n > 50）

体験頻度 ( n ) は少ないが、体験者の苦痛度が高い項目

ストーマ ( 30 ) 2.33 点、爪膿瘍 ( 23 ) 2.00 点、足や指など身体部位の喪失 ( 25 ) 1.96 点、顔の一部の喪失 ( 6 ) 1.83 点、腫脹の手足症候群 ( 48 ) 1.79 点、爪囲炎 ( 46 ) 1.65 点

### 3.2. 外見症状への対処行動：全般

	n=	毛 髪								皮 膚								爪									
		ウィッグ (かっら)	ケア帽子などと呼ばれる患者向けの帽子	一般に販売されているふつうの帽子	部分用のつけ毛 + ぼうしの組み合わせ	脱毛した人用の専用シャンプー	脱毛防止や再発毛促進に育毛剤や養毛剤	脱毛防止や再発毛促進に頭皮のマッサージ	再発毛後のパーマやヘアカラー	つけまつげ	低刺激や敏感肌用スキンケアや化粧品へ切替	オーガニック素材のスキンケアや化粧品へ切替	よく泡立てた洗顔料で擦らず洗顔する	病院で処方された保湿剤	保湿用のスキンケアや化粧品	肌の色素沈着対策として美白用の化粧品	日焼け止め	肌変化をカバーする化粧は最低限ですぐ除去	肌変化をカバーする化粧をしつかり行う	爪の変化に対し普通のマニキュア	爪の変化に対し患者向けのマニキュア	爪に優しいノンアセトンの除光液	爪切ではなく爪やすりで爪の長さを整える	つけ爪 (ネイルチップ)	ジェルネイルやアクリルネイルを使用	抗癌剤中保冷材やフローズングローブ手足冷却	
患者全体	(1,034)	10.9	11.6	18.2	4.2	3.0	6.1	5.2	6.4	2.4	10.7	6.4	13.9	14.3	19.3	5.5	19.1	8.6	7.3	4.8	2.2	3.4	9.2	1.9	2.7	3.2	
性別	男性	(518)	2.5	6.6	12.4	1.2	1.5	4.8	3.9	1.9	0.8	4.8	2.7	6.9	10.6	10.8	1.5	7.7	3.1	1.9	2.3	2.1	1.4	7.1	1.5	1.2	1.9
	女性	(516)	19.4	16.7	24.0	7.2	4.5	7.4	6.6	10.9	4.1	16.7	10.1	20.9	18.0	27.9	9.5	30.4	14.1	12.6	7.4	2.3	5.4	11.2	2.3	4.3	4.5
頭髮脱毛あり	(230)	44.3	45.7	66.1	14.3	10.4	14.8	12.6	20.9	7.4	26.5	13.0	28.3	33.9	39.6	10.9	39.6	23.5	18.7	13.5	6.1	7.8	20.4	3.9	7.0	10.4	

n=30以上の場合

[比率の差]

- 全体 +10 P~
- 全体 + 5 P~
- 全体 - 5 P~
- 全体 -10 P~

図2 . 外見症状への対処行動全般

### 3.3. 外見変化による日常生活の影響

【外見変化の懸念】外見の変化を気にする状況  
 外見が変わって気になった ( 変化懸念 ) 62.6%  
 外見変化から他人に「がん」と気づかれた  
 ( 可視化不安 ) 22.4%  
 周りから「かわいそうだ」だと思われなくなかった  
 ( 憐れみ拒否 ) 53.4%

【日常生活への影響】  
 外出の機会が減った 40.1%  
 人と会うのがおっくうになった 40.2%  
 仕事や学校を辞めたり休んだ 42.6%  
 職場の人との人間関係がぎくしゃくした 13.0%  
 パートナーとの人間関係がぎくしゃくした 12.0%  
 子どもとの関係がぎくしゃくした 4.9%

外見変化の懸念が、日常生活に及ぼす影響を検討するために共分散構造分析を行った ( 統計ソフト Amos 16.0 )。想定する因果モデル ( Figure 4 ) は、懸念が生活 ( 行動抑制 ) に影響を及ぼすという流れである。GFI=1.000, AGFI=1.000, RMSEA=.000

結果を図3に示す。

日常生活、とりわけ対人関係に影響を与えていたのは、単純に外見の変化を気にすることではなかった。憐れみ拒否 S3 とがん可視化の不安 S2 は、外出 ( 各々 =.32, =.31 ) や対人交流 ( =.29, =.37 )、仕事や学業 ( =.17, =.19 ) を減少させ、人間関係の不和 ( =.26, p, =.25 ) を高めていた。

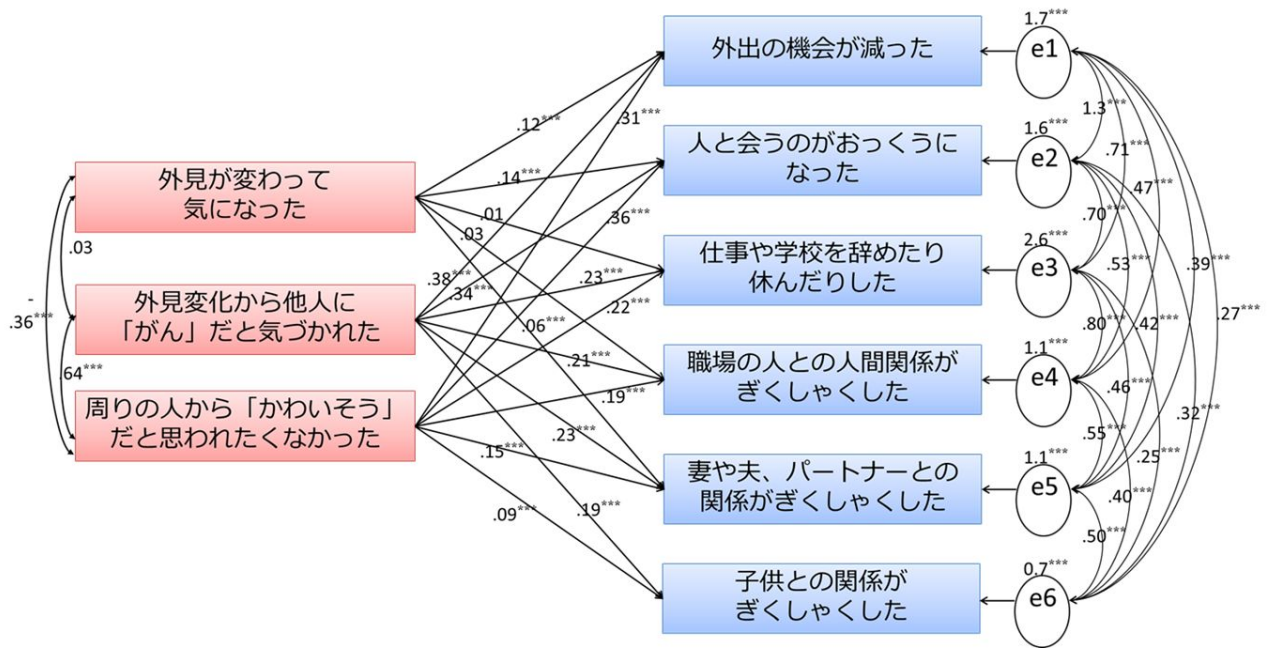


図3 行動抑制項目を従属変数としたパス解析結果

注1) 数値は標準化されたパス係数を表している。 注2) \*\*\* p<.001

4. ) 医療者に対する情報提供の期待と内容

4.1. 外見変化体験者が利用した情報源

利用した情報源は、医療者 62.3%・同病者のネット情報 20.2%・同病の友人知人 19.7%等で医療者が最大の情報源であった。図4に示す。

4.2. 医療者からの情報提供

医療者が外見の対処方法を説明することには、92.6%が肯定し、実際に説明を受けた経験がある人はない人に比して「とても良い」(60.9vs29.1%)が多かった(p<0.01)。

4.3. 情報源への信頼度

情報の信頼度(「非常に信頼」「おおむね

信頼」の計)は、医療者・同病の友人知人・病院配布冊子・病院HP・患者会の人・家族・患者会HP・同病患者のネット情報の順に高かったが、販売会社や販売員の情報、ネットのまとめサイト記事等も50%以上が信頼していた。

4.4. 外見変化に関して知りたい情報

実際に必要であったにもかかわらず十分に得られなかった情報として多かったのは、「職場や学校へ復帰する時の対処方法」(18.8%)、「スキンケアの方法」(16.9%)、「周囲の人への外見変化についての説明方法」(16.8%)、「爪障害への対処方法」(16.4%)、「爪障害の予防方法」(16.2%)であった。

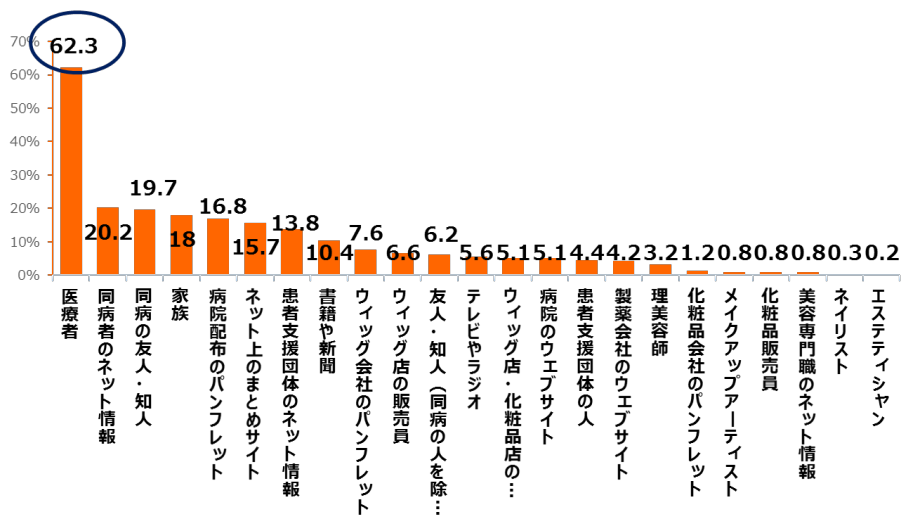


図 4 . 外見の変化体験者が実際に利用した情報源

#### D . 考察

本調査は、インターネットにアクセスできる患者という点でのバイアスは否めない。しかし、部位別罹患率を反映した全国のがん患者 1035 名から回答を得ることができ、今回解析を進めた結果、外見の問題に悩む患者の支援方法について、新たな知見を得ることができた。

##### ) 日常生活のネガティブ変化への影響要因

約 6 割の患者が、がん治療で外見変化を体験したと答えたが、性差や疾患差がみられた。また、同じ体型変化でも、痩せることや体毛などの脱毛は太ることや頭髮脱毛に比べて苦痛が少なく、現代の美容的価値感を反映していた。

また、日常生活、とりわけ対人関係に悪影響を与えていたのは、単純に外見の変化が気になるか否かではなく、かわいそうだと思われたくないという気持ちや、がんであることが露見してしまうのではないかと、という不安であった。患者自身が、外見の変化やケアの状況をどのように捉えるかが、ネガティブな行動に関連する以上、この認知の変容を医療者の支援方法に含む必要性

が高い。すなわち、対処技術だけでなく、がんと外見に対する認知変容のための情報

提供や教育が必要である。

##### ) 医療者に対する情報提供の期待と課題

外見問題の対処方法に関して、医療者による情報提供への期待が高い一方で、より患者の情報リテラシーを高める必要性や、外見の周囲への説明方法など情報のアンメットニーズの存在も示唆された。

#### E . 結論

いずれも今後の医療者への教育プログラムを作成するにあたって必要な、基礎資料となり得る貴重なデータである。

今後、より詳細に内容を分析し、検討しながら研修プログラムに反映させてゆく予定である。

#### 文献

1. Flexen, J., Ghazali, N., Lowe, D., & Rogers, S. N. (2012). Identifying appearance-related concerns in routine follow-up clinics following

- treatment for oral and oropharyngeal cancer. Br J Oral Maxillofac Surg, 50(4), 314-320.
2. 大坊郁夫 (2001). 化粧行動の社会心理学：化粧する人間のこころと行動 (Vol. 9): 北大路書房.
  3. Nozawa, K., Shimizu, C., Kakimoto, M. et al.(2013). Quantitative assessment of appearance changes and related distress in cancer patients. Psychooncology, 22(9), 2140-2147.
  4. Nozawa K., Tomita M., Takahashi E., Toma S., Arai Y., Takahashi M. (2017) Distress from changes in physical appearance and support through information provision in male cancer patients Jpn J Clin Oncol 1-8. DOI:https://doi.org/10.1093/jjco/hyx069Published: 08 June 2017
  5. 鈴木公啓・飯野京子・嶋津多恵子・佐川美枝子・綿貫成明・市川智里・栗原美穂・坂本はと恵・栗原陽子・上杉英生・野澤桂子・矢澤美香子・藤間勝子,がん化学療法を受ける患者への脱毛や爪の変化に関する情報提供の内容と方法 東京未来大学研究紀要 Vol.10 2017.3 pp.87 - 95
  6. Nozawa, K., Ichimura, M., Oshima, A., Tokunaga, E., Masuda, N., Kitano, A., et al. The present state and perception of young women with breast cancer towards breast reconstructive surgery. Int J Clin Oncol. : 20, Issue 2 (2015), Page 324-33
  7. 藤間勝子, 野澤桂子, 清水千佳子. 化学療法により乳がん患者が体験する外見の変化とその対処行動の構造国立病院看護研究学会誌 巻: 11 号: 1 ページ: 13-20,2015年

F. 健康危険情報 なし

G. 研究発表

- ・総合研究報告書 p7～一括記載
- ・投稿中論文 p 39  
がん治療に伴う外見変化と対処行動  
～男女別部位別罹患率に対応した  
1035名の患者対象調査から～
- ・新聞掲載 p 55

H. 知的財産権の出願・登録状況 なし



## 投稿中論文

### がん治療に伴う外見変化と対処行動

～男女別部位別罹患率に対応した 1035 名の患者対象調査から～

Changes in appearance associated with cancer treatment and coping behaviors-Survey of 1035 participants based on incidence rate by gender and cancer site -

野澤 桂子 Keiko Nozawa 藤間 勝子 Shoko Toma

国立がん研究センター 中央病院 アピランス支援センター

National Cancer Center Hospital, Appearance Support Center

キーワード：外見変化，脱毛，アピランスケア，情報，対処行動

#### <要旨>

【目的】外見変化に悩む患者に対して適切に情報提供を行うために、外見変化や対処行動の実態と情報・支援のニーズを明らかにする。

【方法】調査会社に登録し本研究の適格審査を経た患者から、可能な限りがんの男女別部位別罹患率（がんの統計 2017）に比例するよう対象候補者を無作為抽出し、インターネット調査を実施した。

【結果】有効回答 1034 名(男性 518,女性 516),平均年齢 58.7 才(26-74 才),外見変化の体験者は 601 名(58.1%)。医療者が外見に関連する情報提供を行うことは、患者の 92.7%が肯定し、実際に患者の 62.3%が、医療者から情報提供を受けていた。しかし、爪障害(49.1%)や再発毛(42.6%)、脱毛前のケアや準備(38.4%)、地域助成などの費用軽減制度(36.4%)、職場や学校へ復帰する時の対処方法(30.9%)などの情報は必要だが十分に得られていなかったと回答した。

【結語】医療者の情報発信に対する期待は大きい。本研究データをもとに、医療者の情報提供について整備改善してゆく必要がある。

#### <Abstract>

[Objectives] Changes in appearance associated with cancer treatment, coping behaviors, and information/support needs of patients were investigated to provide appropriate information to patients with changes to their appearance.

[Methods] An online survey was conducted among patients registered with a research company that had been screened for eligibility for this study. They were randomly sampled so that the composition of the sample would be proportional to the incidence rate by gender and cancer site (Cancer Statistics Update 2017).

[Results] There were 1034 valid responses (518 men and 516 women). The mean age of the participants was 58.7 years (age range=26-74 years). Of these participants, 601 (58.1%) experienced changes in appearance. Moreover, 92.7% agreed that health care professionals should provide information related to their

appearance. Furthermore, 62.3% had obtained information from health care professionals. On the other hand, some participants responded that they required information related to the following issues but could not get sufficient information. These issues included nail disorders (49.1%), hair regrowth (42.6%), care and preparation for hair loss (38.4%), cost reduction systems such as local government financial assistance (36.4%), and coping methods for returning to work or school (30.9%).

[Conclusions] Patients have high expectations of health care professionals regarding information. It is suggested that provision of information by health care professionals should be organized based on the findings of this study.

#### . [背景と目的]

就労を継続しているがん患者が 32.5 万人もいることが報告 1)され、がんの治療法や有害事象の緩和技術の進歩、入院期間の短縮化、外来治療環境の整備などにより、社会と接点をもちながら治療を行う患者が増加している。しかし、手術療法、放射線療法、化学療法などの治療は、患者の外見に変化（以下、「外見変化」とする）をもたらす、その QOL を低下させるため、医療においてもアピランスケア（外見ケア）などの適切な支援が求められている。

平成 29 年 10 月に閣議決定された第 3 期「がん対策推進基本計画」2)では、「尊厳を持って安心して暮らせる社会の構築」を目指すための個別課題として、「がん患者等の就労を含めた社会的な問題（サバイバーシップ支援）」が示された。そして、それを可能とするための具体的な課題の 1 つとして、がん治療に対する外見（アピランス）の変化（爪、皮膚障害、脱毛等）が提示され、「国は、がん患者の更なる QOL の向上を目指し、医療従事者を対象としたアピランス支援研修等の開催」等を推進してゆく方向性が示された。このように、「がん対策」に初めて「アピランス」という用語が明記され、今後は、医療者が行うアピランスケアの標準化及び均てん化を図ることが求められている。そこで、医療者のアピランスケアの質を担保する e-learning 教育プログラムの作成など、がん患者へのアピランスケアの提供体制モデルの構築が必要であり、そのためには、新たな基礎データを得なければならないと考えられる。

もっとも、その基礎データとなりうる外見変化に対する研究は、これまでも行われている。しかし、その研究は、男性 3)や乳がん患者 4)のように対象を限定したものであり、また、全癌種を対象とした 2009 年の調査 5)から 10 年以上が経過しているなど、現状を反映しているものではない。実際にも、分子標的薬治療の増加や免疫療法の登場など、治療状況が変化しているのみならず、政策的に就労支援が推進されるなど、ここ数年で患者をとりまく社会状況は大きく変化している。

本研究は、日本のがん患者における外見の問題の全体像を把握することを目的とし、可能な限りがん種別罹患割合に合致するようにサンプリングされたがん患者を対象に調査を行い、体験した外見変化や実施した対処方法、情報・支援のニーズなどを明らかにする。

## ・[研究方法]

### 1. 研究対象者

がん治療中もしくは治療が終了し経過観察中の者（20歳以上75歳未満：男女）で、本研究への参加同意が得られ、インターネットデバイスに関する操作に問題のない者1000名。

#### ・対象者数設定の根拠

結果の解析でがん種の違いによる検討をするなど、回答をグループ化して分析を行うために約1,000件のデータが必要となる。

### 2. 調査方法

#### ・横断研究，インターネット調査による無記名自記式質問紙調査

・日本マーケティングリサーチ協会に加盟する調査会社から，モニターに関する公開資料を参考に，登録属性の著しい偏りや登録情報の更新頻度を研究者間で点検し，インターネット調査会社（株式会社マクロミル）を選定した。

当該インターネット調査会社に調査協力登録を行っているモニターを対象に，スクリーニング調査を行い，適格患者を抽出した。その上で，可能な限りがんの男女別部位別罹患率<sup>6)</sup>に比例するよう対象候補者を無作為抽出し，有効回答約1,000名に達するまでインターネット調査を実施した。なお，性別および年代（20代，30代，40代，50代，60代以上）に関する割付けをおこなった。

### 3. 調査内容

がん治療による外見変化とその情報・支援ニーズについて調査した。具体的な調査項目は，先行研究<sup>3)5)7)</sup>および予備調査の結果をもとに，医師1名・看護師2名・臨床心理士2名・美容専門家2名・患者会代表4名で検討のうえ，以下の質問項目を作成した。

#### 1) 対象者の個人属性

年齢，性別，職業，学歴，罹患したがん種

#### 2) 治療に伴う外見変化

まず，外見変化の経験の有無を尋ね，経験ありと回答した者には，個々の外見変化の症状（30項目）について「現在，体験している」「過去に体験した」「全く体験なし」の回答を求めた。

#### 3) 対処行動 情報収集行動

外見変化に関する情報収集の実態を明らかにするために，まず，医療者による情報提供について質問した。自身が受けた情報提供に対する全般的満足度や，医療者が外見の情報提供を行う必要性について，「とても良い」を4，「どちらかといえば良い」を3，「どちらかといえばよいと思わない」を2，「全くよいと思わない」を1，の4件法を用いた。

次に，医療者含む外見変化に関する20の情報源（家族，患者会，製品販売業者，インターネット情報など）について，利用の有無と信頼度を質問した。「非常に信頼できる」4から「全く信頼できない」1の4件法である。

最後に，外見変化の対処方法に関する情報12項目（脱毛後のケア方法，職場や学校へ復帰する時の対処方法など）について，その必要性和獲得の有無を「必要であり，十分に得られた」「必要であっ

たが、十分に得られなかった」「必要な情報ではなかった」の3件法で尋ねた。

#### 4) 対処行動 日常整容関連行動

外見変化へ対処行動として、ふだんと異なる日常整容行為24項目（ウィッグ、保湿剤など）を行ったか否かを尋ねた。また、実際の皮膚変化の有無とスキンケア製品の選択行動について「治療開始後に肌の変化を感じて製品を変更した」「肌の変化は感じなかったが、肌に優しいものが良いと考えて製品を変更した」「治療開始後に医療者の指示で製品を変更した」「特に変更しなかった」「その他」の5件法で尋ねた。最後に、ウィッグ購入に関して、購入の有無・購入回数・購入価格を尋ねた。

## 4. 解析方法

### 主要な統計学的考察

- ・各変数の度数分布，記述統計の算出を行う。
- ・対象者の個人属性や情報獲得の状況，対処方法について統計的解析（ $\chi^2$ 検定，T検定，等）を行う。

## 5. 倫理的配慮

本研究は国立がん研究センター研究倫理審査委員会で研究実施の承認（課題番号：2017-417）を得るとともに、スクリーニング調査時に説明同意を得られた者のみを対象とした。

## 6. 調査期間

2018年3月2日～3月22日

### 【結果】

#### 1. 対象者の属性

がん患者1034名（男性518名，女性516名），年齢は，平均値 $58.66 \pm 10.64$ 才，中央値60（26-74）才であった。職業や疾患構成は表1の通りである。

#### 2. 治療に伴う外見変化

がんの治療による外見変化を体験したと答えた人は601名，全体の58.1%であった。601名が体験した各外見の症状の割合及び患者全体での割合を図1に示す。「手術による傷あと」が体験者の84.5%と，最も多かった。その他の症状では，「頭髪の脱毛」，「爪が薄くもろくなる」，「肌の乾燥」など，化学療法によると推測されるものが上位を占めた。

#### 3. 対処行動 情報収集行動

##### （1）医療者による情報提供

全患者の49.4%（511/1034）が，外見変化やその対処方法について，医療者から情報提供を受けていた。その情報提供への評価は，「とても満足」24.1%，「どちらかといえば満足」53.6%，「ど

ちらかといえば不満足」17.4%、「全く満足していない」4.9%であった。

一般に医療者が外見に関連する情報提供を行うことについては、「とても良い」44.8%、「どちらかといえば良い」47.9%、「どちらかといえば良いと思わない」4.8%、「全く良いと思わない」2.5%であり、全患者の92.6%（957/1034名）が肯定した。そこで、評価への関連性をみるために2検定を行ったところ実際に医療者から説明された体験（ $\chi^2 = 116.18, df=3, p<.001$ ）や外見変化の体験（ $\chi^2 = 43.89, df=3, p<.001$ ）があることが有意だった。すなわち、同じ肯定意見であっても、実際に医療者から説明された体験のある人（ $n=511$ ）は、説明体験のない人（ $n=523$ ）に比して「とても良い」（60.9%vs29.1%）ことだと考え、同様に、実際に外見変化を体験した人（ $n=601$ ）はそうでない人（ $n=433$ ）に比して、「とても良い」（52.2%vs34.4%）と考えていた。

## （2）各種情報源の利用

外見変化の体験者（ $n=594$ ）が実際に利用した情報源を表2に示す。62.3%の患者が医療者から外見に関する情報提供を受けており、患者にとって最大の情報源となっていた。各情報源の利用割合について2検定を行ったところ、10項目で性差がみられた。

## （3）情報源に対する信頼度

患者（ $n=1034$ ）が「外見変化に対処するための情報源」として有する信頼度を図2に示す。医療者に対する信頼度が全体で92.5%と最も高かったが、販売店のインターネット情報52.5%やインターネット上のまとめサイト50.8%などに対しても約半数が信頼していた。そこで、信頼度の平均値をt検定により比較したところ、多くの項目で性差がみられた。

## （4）外見の問題の対処に必要であった情報

外見変化の対処方法に関する情報について、その必要性和獲得の有無を図3に示す。患者全体では、職場や学校へ復帰する時の対処方法（28.8%）や、周囲の人への外見変化についての説明方法（25.9%）など、対人交流シーンを想定した情報の獲得を希望する患者が多かった。また、症状の体験者ごとに該当情報を検討すると、爪障害や再発毛に関する項目について、「必要であったが十分に得られなかった」と回答した患者が40%を超えていた。

## 4. 対処行動 日常整容関連行動

### （1）外見変化への対処の経験

対処行動（24項目）については表3に示す。患者全体としては、特別な日常整容品を用いることは少ないが、ウィッグ・ケア帽子・日焼け止め・保湿用のスキンケアや化粧品など、男女による差が認められた。また、頭皮脱毛経験者は、抗がん剤治療を行う患者であるためか、多くの製品を利用していた。

### （2）実際の皮膚変化の有無とスキンケア製品の選択行動

肌の変化を感じなかったが、肌に優しいものを使用した方が良いと考えて変更した人（60名）は、それ以外の選択行動をとった人と年齢や性別に違いがあるかを検討した。その結果、症状や医療者の指示

が無いにも関わらず予防的に行動したのは、女性が多く ( $F = 51.407, df = 4, p < .001$ )、年齢 ( $52.75 \pm 11.6$  才 vs  $59.02 \pm 10.5$  才) が若かった ( $t = 4.471, df = 1032, p < .001$ )。

### (3) ウィッグ購入に関する項目：購入の有無・購入回数・購入価格

ウィッグの購入回数は、1人平均 1.9 個 ( $n = 126$ ) であった。図 5 に示すように、購入回数が増えるごとに、平均年齢が低下していた。購入価格については、50 名の女性から回答があった。回答者の平均年齢は  $56.28 \pm 9.7$  歳、癌種は乳癌 26 名・大腸癌 6 名・その他 16 名であった。ウィッグの記載価格は 1900 円から 70 万円と幅広かったが、平均値に大きな影響を及ぼす標準偏差 2SD を超える価格を除外して算出した。その結果、ウィッグの平均価格は、76,785 円 ( $\pm 88324$  円)、中央値 38,000 円 (3,000 円-350,000 円) であった。

## .[考察]

### 1. 治療に伴う外見変化の実態

本研究において、対象者を男女別部位別罹患率に合わせてサンプリングした結果、外見変化を体験したと答えたのは全体の 58.1% に過ぎず、がん治療によって全ての患者に外見変化が生じるとは限らないことが示唆された。もちろん、自己申告による回顧的調査であるため、患者にとって微細な変化を失念している可能性も否めない。しかし、本研究は、通院治療センターでの脱毛調査のように外見の問題を詳細に把握するために当該症状が生じる患者のみを対象に行われた先行研究と異なり、がん患者が直面する外見の問題の総体を明らかにすることができた。

とりわけ、脱毛は、がん患者の苦痛度調査で常に上位にあがり、本研究グループが行った一般人 1000 名の意識調査 8) でも、その 56.8% が、「がん患者の 70% 以上は脱毛する」と考えている代表的副作用である。しかし、実際は 22.2% の患者しか脱毛を経験していなかった。これは、保険会社が自社のがん保険契約者に対して行った調査 9) と同様の結果である。このような情報は、がんに罹患したばかりの患者が、イメージに惑わされてパニックにならないためにも、適切に提供されなければならない。

### 2. 患者の対処行動 情報収集活動

患者が、外見の問題に対して、どのような対処行動をとり、何に満足し、何を困っているのかについて明らかにするために、外見変化に対する情報収集活動を調査した。

#### (1) 医療者による情報提供について

患者全体では、約半数が医療者から外見変化やその対処方法に関する情報提供を受けたと回答しており、外見変化を体験したと答えた人 (56.8%) の多くが、医療者により説明を受けていることが推測された。

また、医療者が外見に関する情報提供を行うこと自体についても、92.6% が肯定していた。そして、実際に医療者から説明を受けた体験を持つ患者や外見が変化した体験を持つ患者は、そうでない者に比して、より、医療者による説明を高く評価しており、医療者による説明の必要性を実感していると考

えられる。

さらに、実際に外見変化を生じた患者にとって、医療者は最大の情報源であり、20 の情報源の中で 1 位というだけでなく、2 位以下と比較しても 3 倍以上のアクセスとなっていた。そして、信頼度も最も高いことから、医療者が患者に与える影響は甚大であり、医療者は、内容を吟味して情報提供を行わなければならない。

## (2) 情報源とその信頼度

一般にがん患者は、情報収集に熱心であることが指摘されている。例えば、がん患者は、胃・十二指腸潰瘍の患者より、有意に情報収集活動を行い、医療者に対する信頼度も高い (10)。そして、初期を過ぎるとその差はなくなるものの、初期の乳癌・前立腺癌は、大腸癌患者よりも情報を探索する (11) など、癌種による違いも示されてきた。

本研究では、医療者が最もアクセスが多く信頼度も高い情報源であるが、その他の多くの情報源については、性別によるアクセス量や信頼度に有意な差がみられた。すなわち、女性の方が、「医療者」「家族」を除く多くの情報源に積極的にアクセスし、かつ、対象を信頼しやすいという結果である。これは、男性は医師や家族以外に相談することが少ない (3) という先行研究に合致することに加え、対象も化粧品店など女性にとって日常的に親しみやすい情報源が多いことが考えられる。また、一般的に病院や、同病の患者や団体から提供される情報は、信頼度が高い。しかし、高橋ら (12) の研究によれば、インターネット上の情報の 4 割が医学的に正しくないか根拠のわからない情報である。そうだとすれば、医療者教育においては、患者の情報リテラシーを向上させる要素を入れる必要がある。

## (3) 外見の問題の対処に必要な情報

患者の外見の悩みの本質は、その対象部位そのものというより、それに起因するがんのイメージや、他者に病気が露見してかわいそうな人だと思われ、対等な人間関係が崩れてしまう不安であることが示されている (13)。

本研究でも、対人交流シーンを想定した対処方法を知りたい、というニーズが高かった。また、対象となる症状を体験した患者を母集団としたニーズ調査では、脱毛前の準備については、十分に得られたと 35.3% が答えたように、一定程度情報提供が充実してきたことがうかがえる。その反面、脱毛後のケアや再発毛に関することなど、再発毛が十分でないことが問題視されている状況 (14) に関連する項目や、爪障害など、新たな治療の増加に伴い問題視されるようになった項目が十分な情報を得られていなかった。これらは、医療者教育の中に十分に組み込んで、患者支援に繋げる必要がある。

## 3. 患者の対処行動 患者の日常整容品やケアの選択行動

がんに罹患したことによって、患者向けとされる特別な日常整容品の使用やケア行動を行ったのかを調査したところ、情報収集活動と同様の傾向がみられた。すなわち、特別な製品やケアを選択した患者は、全体では少ないものの、女性が男性に比してより積極的に行動していた。とりわけ、症状が無く医療者から勧められなかったにも関わらず、特別なスキンケア製品を使用する、という自主的な予防行動をとっていたのは若い女性だった。

脱毛患者が悩むウィッグの購入回数については、乳癌患者 333 名を対象とした先行研究 (15) において 1 人あたり平均 1.1 個だったのに対して、本研究では 1.9 個と増加していた。また年齢が低下するほど

購入個数が増える傾向にあった。価格は回答者数が少ないため判断できないが、安価な物を複数所持し、使い分けるように、患者の意識が変化している可能性もある。

#### 4. 研究のまとめと限界

本研究により、外見の変化は、全てのがん患者に生じるとは限らず、脱毛のように、一般のイメージが実数と乖離する副作用症状もあることや、患者が外見の問題の対処するため必要な情報が示された。今後、これらを、医療者教育プログラムの内容に含めることが重要である。また、医療者が外見に関する情報提供を行うことに対して、患者の期待が大きく、医療者の責任は重いといえる。その内容や方法に関して、適切な情報提供が求められる。

なお、本研究は、回顧的情報に基づく自己申告の調査であり、その精度には限界がある。またインターネット調査にはバイアスが入りやすいことも指摘されており、本研究のサンプルが、厳密にがん患者全体を表すものとはいえない。しかしながら、医療者向け教育資料を開発するために、がん患者のアピアランス問題に対する対処法を幅広く把握するという目的を達成する上で、インターネット調査の手法を用いることは有効である。今後は、より精緻な解釈ができるよう、今回の情報で不十分だった事項については、従来型の調査を実施し、合わせて補完しながら検証してゆきたい。

#### 研究の資金源

本研究は、平成 29 年度厚生労働科学研究費（がん対策推進総合研究事業）「がん患者に対するアピアランスケアの均てん化と指導者教育プログラムの構築に向けた研究」班（主任研究者：野澤桂子）（H29-がん対策-一般-027）の一環として実施された。

#### 謝辞

本研究にあたり、ご協力いただいた対象者の皆様、患者代表の岸田 徹（NPO 法人がんノート代表理事）様、山崎 多賀子（NPO 法人キャンサーリボンズ理事）様、上坂 美花（チアウーマン第 3・4 期事務局長）、改發 厚（精巣腫瘍患者友の会代表）様、桜井なおみ（一般社団法人 CSR プロジェクト代表理事）様、国立国際医療研究センター病院乳腺腫瘍内科清水千佳子先生には、心より御礼申し上げます。

#### 【文献】

- 1)厚生労働省、がん患者の就労や就労支援に関する現状 資料 3：厚生労働省「平成 22 年国民生活基礎調査」を基に同省健康局にて別集計したもの、2020 年 2 月 28 日確認、<https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-10901000-Kenkoukyoku-Soumuka/0000037517.pdf>
- 2)厚生労働省、がん対策推進基本計画（第 3 期）、2020 年 2 月 28 日確認、<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-10900000-Kenkoukyoku/0000196975.pdf>
- 3)Nozawa K, Tomita M, Takahashi E, Toma S, Arai Y, Takahashi M, Distress from changes in physical appearance and support through information provision in male cancer patients, *Jpn J Clin Oncol*, 1;47(8), 720-727, 2017.
- 4)Nozawa K, Ichimura M, Oshima A, Tokunaga E, Masuda N, Kitano A, et al, The present state and perception of young women with breast cancer towards breast



- reconstructive surgery , *Int J Clin Oncol* , 20 , 324-33 , 2015.
- 5)Nozawa K, Shimizu C, Kakimoto M, Mizota Y, Yamamoto S, Takahashi Y et al , Quantitative assessment of appearance changes and related distress in cancer patients , *Psychooncology* , 22(9) , 2140-2147 , 2013.
- 6)国立がん研究センターがん情報サービス , *がんの統計 2017 : 部位別がん罹患数 (2013年)* , 2020年2月28日確認 ,  
[https://ganjoho.jp/reg\\_stat/statistics/brochure/backnumber/2017\\_jp.html](https://ganjoho.jp/reg_stat/statistics/brochure/backnumber/2017_jp.html)
- 7)鈴木公啓 , 飯野京子 , 嶋津多恵子 , 佐川美枝子 , 綿貫成明 , 市川智里 , 他 , *がん化学療法を受ける患者への脱毛や爪の変化に関する情報提供の内容と方法* , *東京未来大学研究紀要* , Vol.10.87-95 , 2017.
- 8)藤間 勝子 , 野澤 桂子 , 上坂 美花 , 改發 厚 , 岸田 徹 , 桜井 なおみ , 他 ,  
一般人を対象とした、がん治療に伴う外見変化の知識・対処に関するインターネット調査 , 第 56 回日本癌治療学会学術集会 口演 , 2018 年 10 月 20 日 (論文未発表)
- 9)朝日新聞,*がん治療の脱毛「保険」でカバー「外見ケア特約」導入 (2018年1月31)* , 2020年2月28日確認 ,  
<https://www.asahi.com/articles/ASL1025P5L10UBQU004.html>
- 10)小林 怜 , *日本における患者の医療情報収集行動 がん患者と胃・十二指腸潰瘍患者の比較* , *東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究* , 89 , 67-81 , 2015.
- 11)Nagler, R H., Gray, S W., Romantan, A R., Kelly, BJ., DeMichele, A., Armstrong, K., et al , Differences in information seeking among breast, prostate, and colorectal cancer patients: Results from a population-based survey , *Patient Education and Counseling* , 81S1 , 54-62 , 2010.
- 12)高橋 恵理子 , 野澤 桂子 , 矢澤 美香子 , 藤間 勝子 , 鈴木 公啓 , *がんに関する情報収集の実態と外見ケアに関するインターネット情報* , *がん看護* , 21 ( 6 ) , 南江堂 , 629-634. 2016.
- 13)野澤桂子,藤間勝子,清水千佳子,飯野京子 , *化学療法により乳がん患者が体験する外見の変化とその対処行動の構造* , *国立病院看護研究学会誌* , 11(1) , 13-20 , 2015.
- 14)Watanabe Takanori , Yagata Hiroshi , Saito Mitsue , Okada Hiroko , Yajima Tamiko , Tamai Nao , et al , A multicenter survey of temporal changes in chemotherapy-induced hair loss in breast cancer patients , *PLOS ONE* , 14(1):e0208118 ,  
doi: 10.1371/journal.pone.0208118 , eCollection , 2019.
- 15)野澤 桂子 , *若年乳がん患者における外見変化への対処行動の実態* , 第 26 回日本がん看護学会学術集会 口演 , 2012 年 2 月 12 日 , (論文未発表)

表 1.対象者の属性		(n=1034)	
		n (%)	
性別	男性	518(50.0)	
	女性	516(50.0)	
疾患部位	胃	93(9.0)	
	大腸	80(7.7)	
	肺	79(7.6)	
	男性	前立腺	76(7.4)
	肝臓	29(2.8)	
	その他	161(15.6)	
	乳房	120(11.6)	
	大腸	82(7.9)	
	女性	胃	59(5.7)
	肺	36(3.5)	
子宮	36(3.5)		
その他	183(17.7)		
学歴	中学校	34(3.3)	
	高校	325(31.4)	
	専門・専修学校	103(10.1)	
	短大・高専	146(14.1)	
	大学・大学院	426(41.2)	
	その他	(0.0)	

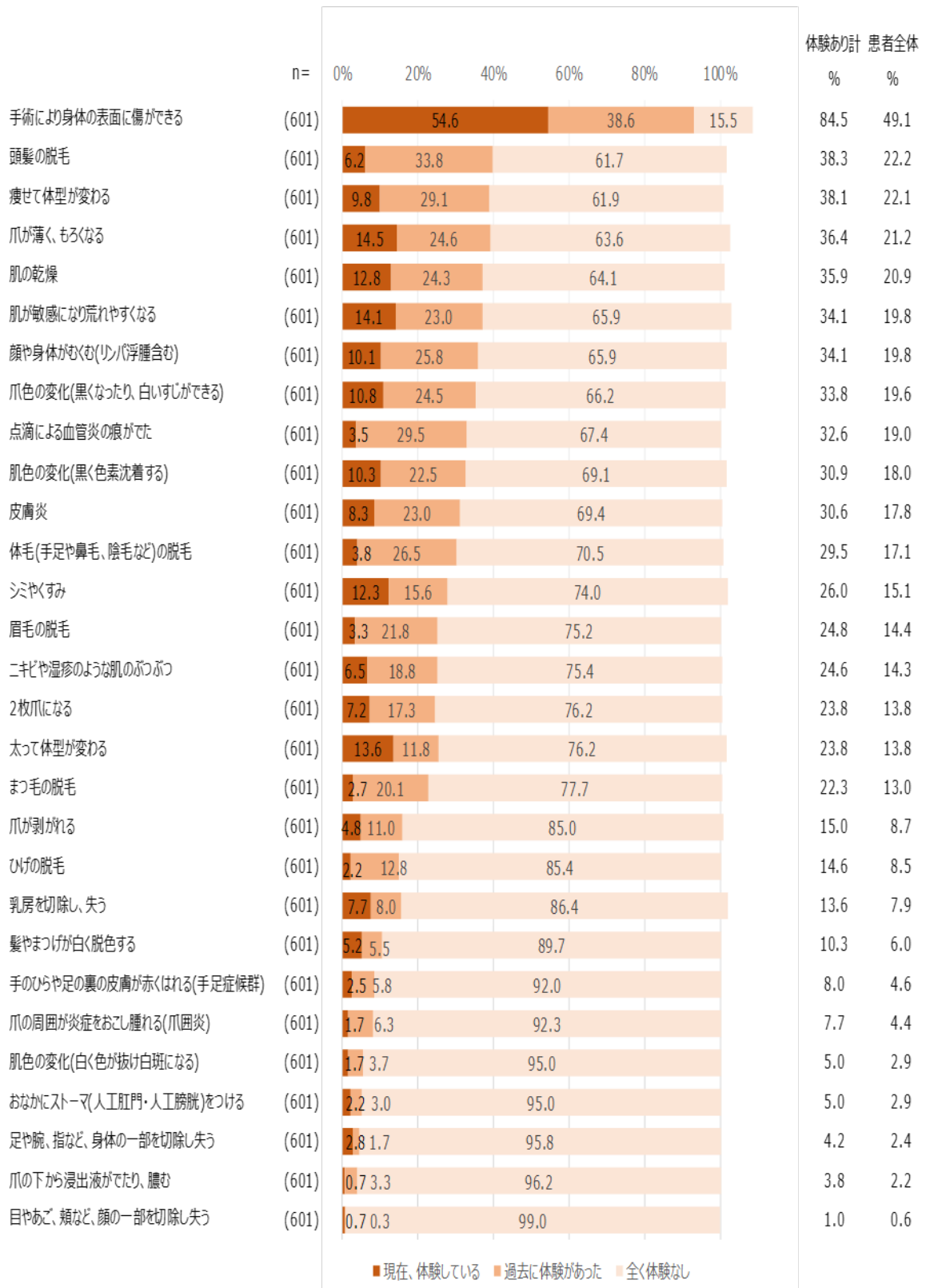


図1：体験した外見の変化

表 2：各種情報源を外見変化の体験者が実際に利用した割合

	患者全体 % n=594	男 % n=240	女 % n=354	<sup>2</sup> 値
医療者（医師・看護師・薬剤師など）	62.3	60.0	63.8	0.43
同病者のネット情報	20.2	9.6	27.4	28.55**
同じ病気の友人・知人	19.7	12.1	24.9	15.06**
家族	18.0	19.6	16.9	0.51
病院配布のパンフレット	16.8	10.8	20.9	11.11**
ネット上のまとめサイトの記事	15.7	12.1	18.1	3.48
患者支援団体のネット情報	13.8	8.8	17.2	8.84**
書籍や新聞	10.4	10.0	10.7	0.02
ウィッグ会社のパンフレット	7.6	0.8	12.1	26.36**
ウィッグ販売店の販売員	6.6	1.3	10.2	18.72**
友人・知人（同病の人を除く）	6.2	3.8	7.9	4.33*
テレビやラジオ	5.6	6.7	4.8	0.9
ウィッグ店・化粧品店のネット情報	5.1	0.8	7.9	15.07**
病院が発信するのウェブサイト	5.1	4.6	5.4	0.2
患者支援団体の人	4.4	1.7	6.2	7.16**
製薬会社のウェブサイト	4.2	3.8	4.5	0.22
理美容師	3.2	0.4	5.1	10.15**
化粧品会社のパンフレット	1.2	0.4	1.7	2.03
メイクアップアーティスト	0.8	0.4	1.1	0.88
化粧品販売店の販売員	0.8	—	1.4	3.44
美容専門職のネット情報	0.8	—	1.4	3.44
ネイリスト	0.3	—	0.6	1.37
エステティシャン	0.2	—	0.3	0.68

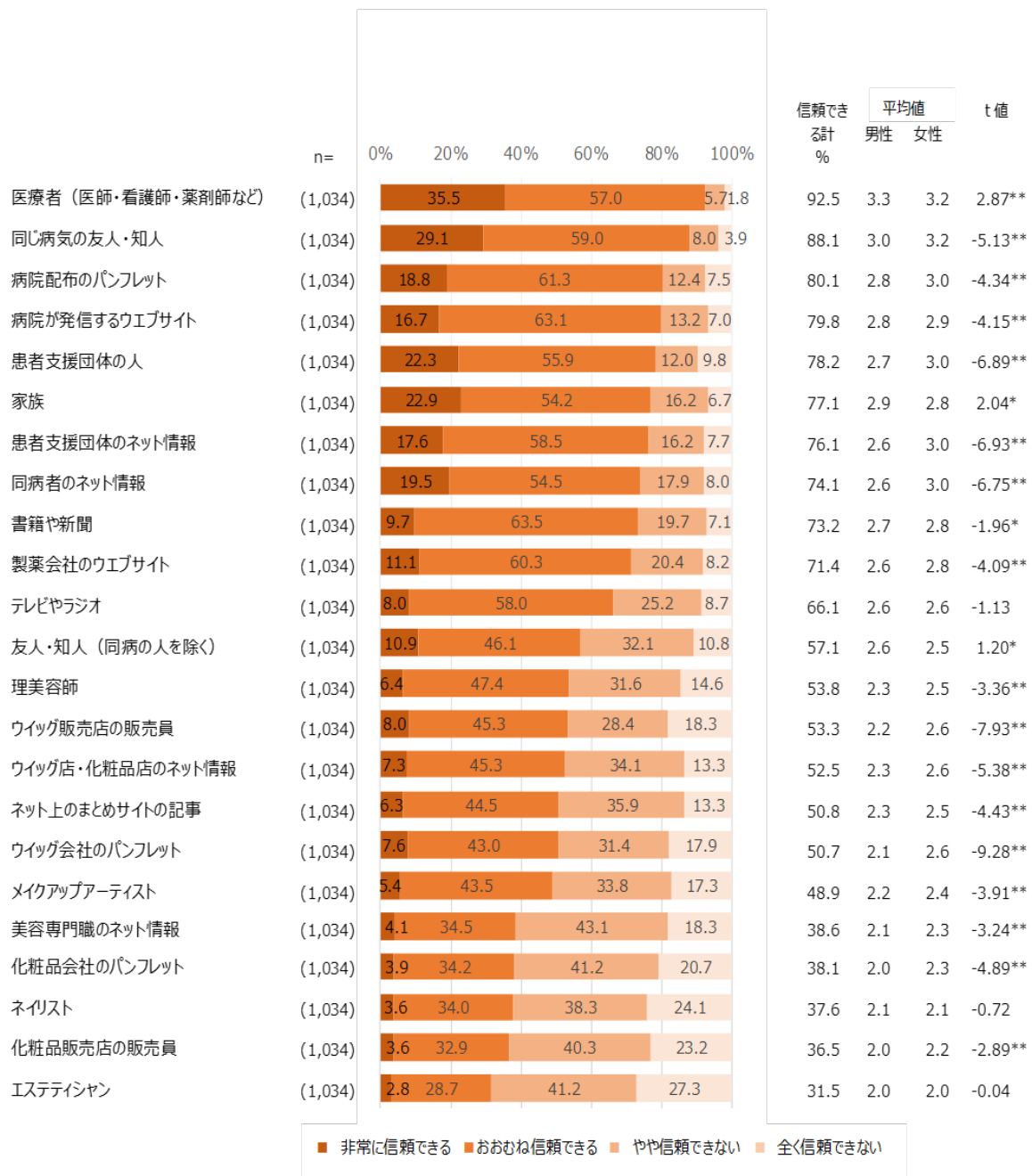


図2：各種情報源への信頼度

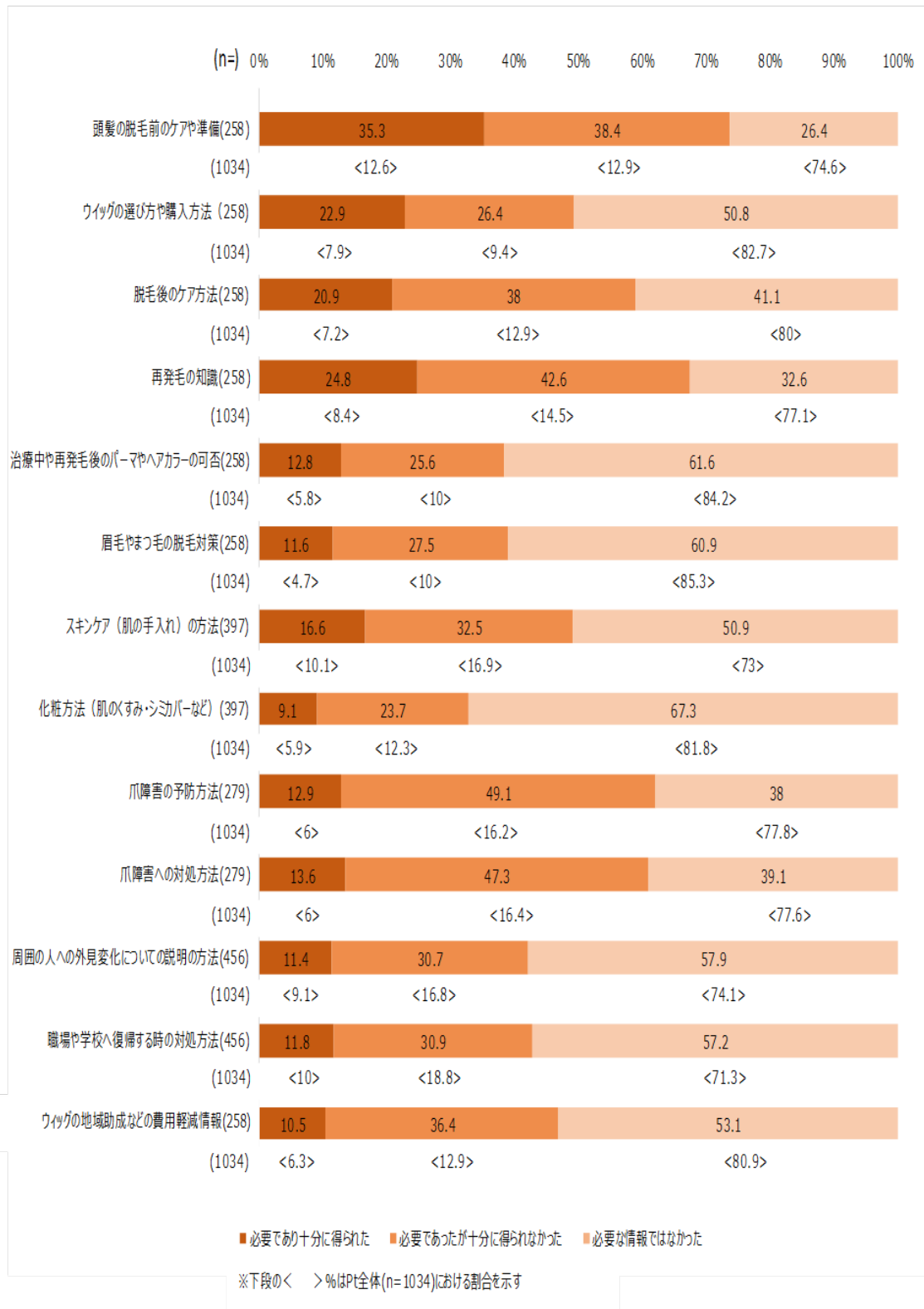


図3：情報の必要性と獲得の有無(n=対象症状の体験者)

0		患者全体	性別		頭髮の脱毛
			男性	女性	体験あり
	n=	(1034)	(518)	(516)	(230)
毛髪	ウィッグ（かつら）	10.9	2.5	19.4	44.3
	帽子（医療用帽子やケア帽子などと呼ばれる患者向けの帽子）	11.6	6.6	16.7	45.7
	一般に販売されているふつうの帽子	18.2	12.4	24.0	66.1
	部分用のつけ毛+ぼうしの組み合わせ	4.2	1.2	7.2	14.3
	脱毛した人用の専用シャンプー	3.0	1.5	4.5	10.4
	脱毛防止や再発毛促進に育毛剤や養毛剤	6.1	4.8	7.4	14.8
	脱毛防止や再発毛促進に頭皮のマッサージ	5.2	3.9	6.6	12.6
	再発毛後のパーマやヘアカラー	6.4	1.9	10.9	20.9
	つけまつげ	2.4	0.8	4.1	7.4
皮膚	低刺激や敏感肌用のスキンケアや化粧品への切り替え	10.7	4.8	16.7	26.5
	オーガニック素材のスキンケアや化粧品への切り替え	6.4	2.7	10.1	13.0
	よく泡立てた洗顔料で擦らず洗顔する	13.9	6.9	20.9	28.3
	病院で処方された保湿剤	14.3	10.6	18.0	33.9
	保湿用のスキンケアや化粧品	19.3	10.8	27.9	39.6
	肌の色素沈着対策として美白用の化粧品	5.5	1.5	9.5	10.9
	日焼け止め	19.1	7.7	30.4	39.6
	肌の変化をカバーする化粧は最低限ですぐ除去	8.6	3.1	14.1	23.5
	肌の変化をカバーする化粧をしっかりと行う	7.3	1.9	12.6	18.7
爪	爪の変化に対し普通のマニキュア	4.8	2.3	7.4	13.5
	爪の変化に対し患者向けのマニキュア	2.2	2.1	2.3	6.1
	爪に優しいノンアセトンの除光液	3.4	1.4	5.4	7.8
	爪切ではなく爪やすりで爪の長さを整える	9.2	7.1	11.2	20.4
	つけ爪（ネイルチップ）	1.9	1.5	2.3	3.9
	ジェルネイルやアクリルネイルを使用	2.7	1.2	4.3	7.0
	抗癌剤中保冷材やフローズングローブ手足冷却	3.2	1.9	4.5	10.4

	全体+10ポイント以上
	全体+5ポイント以上
	全体-5ポイント以上
	全体-10ポイント以上

表3 外見変化への対処の経験(%)

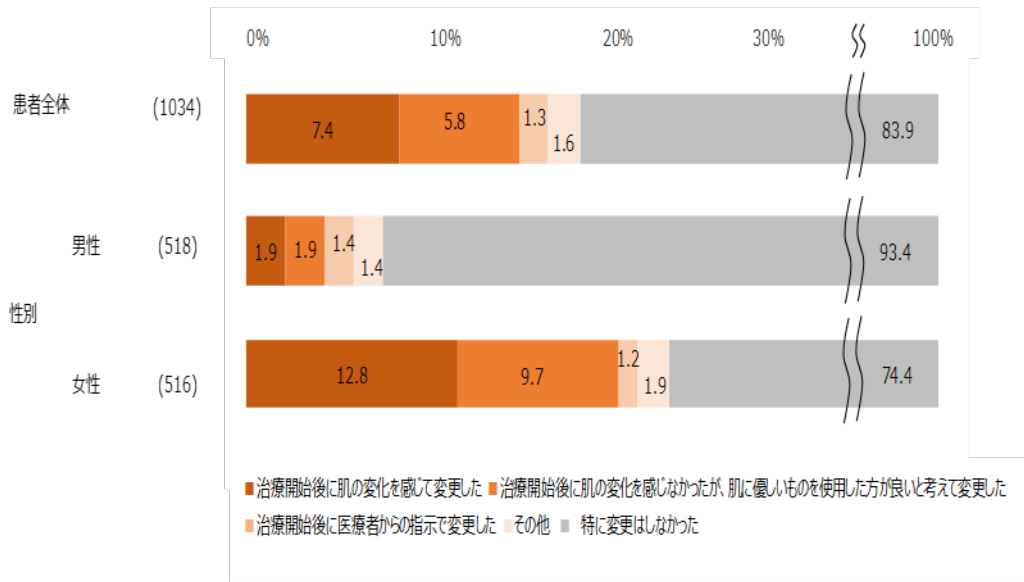


図4：実際の皮膚変化の有無とスキンケア製品の選択行動

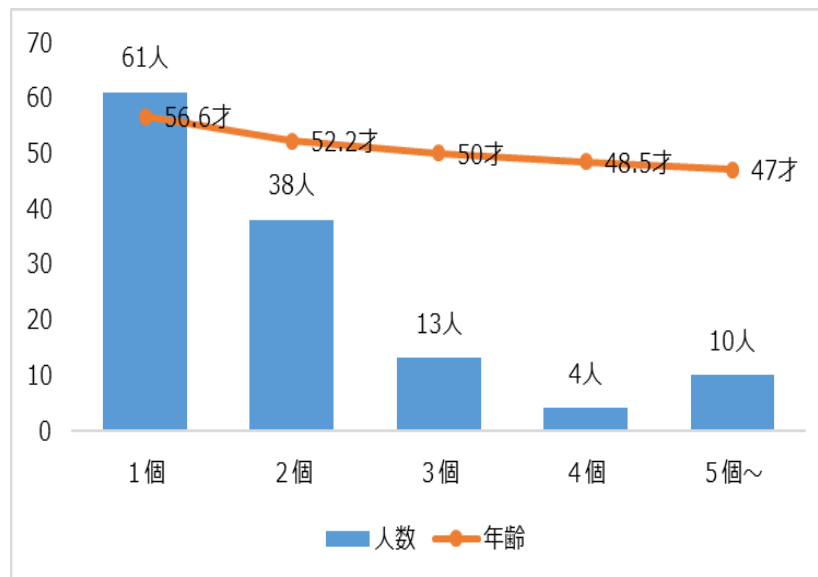


図5 ウィッグ購入に関する項目：購入個数別人数・平均年齢





